

## 相模原殺傷事件から半年

# 社会の中の「優生思想」問う

講演・シンポ 竹内岐阜大教授が講演、当事者・家族が討論

神奈川県相模原市の

知的障害者入所施設

「津久井やまゆり園」で、

入所者19人が死亡、26

人が重軽傷を負った殺

傷事件から半年がたつ

た1月26日、事件の背

景などについて考えよ

うと、講演会とシンポ

ジウム(実行委主催)が

立命館大学国際平和

とに対し、ネット上で

「優生思想の克服、排

除しない社会をつくる

ために」と題して、竹

内章郎・岐阜大教授が

記念講演。容疑者が障

害者を不要とみなす優

生思想を持っていたこ

とに対し、ネット上で

賛同を示す声があった

ことを指摘。「特定の人、

特定の出来事に限定さ

れるのではなく、普通

の庶民にも広がってい

る。広く社会の問題と

して問う必要がある」と

と強調しました。

また、優生思想はナ

チズムとのみ結び付け

られるべきものではな

く、古代ギリシャのフ

ラトンの時代からあっ



講演する竹内教授

たものであり、「犯人個人のありようの問題を超え、人類史の中で根深い問題」と指摘。日本でも平塚らいてうらが優生思想を説いていたことを紹介しました。優生思想は能力主義の徹底と同根である深い刻さを把握すべきと強調。克服のためには、障害や病気を軽減し治療していく営みと障害者を積極的に受け入れていく営みの両方をすすめていくことが必要だと話しました。

シンポジウムでは、

徳山環(障害当事者)、

増田弘子、大西里江(障

害当事者家族)、片山和

枝(学生)、西村睦美(精

神科ソーシャルワ

ーカー)、大江智子(弁護

士)各氏が、事件を受け

て考えたことなどを話

しました(各氏の発言

要旨は14面掲載)。

国政・国会議員のページ

# 相模原殺傷事件から半年 シンポ・各氏の発言



事件を受け、各氏が思いを語ったシンポジウム



## どんな命も尊い

障害当事者家族 大西里江さん

事件のあった日(昨年7月26日)の翌朝、私は難病の重度障害者で入所している娘のもとに飛んでいきました。何かにすくおびえていました。いつもなら面会してすぐに車椅子で外出するのですが、すくおびて初めて外出することを躊躇しました。元職員が起きました事件、園のことを知った

ている人の犯行、信じられない現実、娘の前では感情を抑えて冷静を装うことに必死でした。自らの全てを任せ、信じていた人に、自らの命を奪われた残酷な事件です。私だったら、娘だったら、たとえとも怖くつらく悲しく、胸が苦しいです。家族を失う悲しみは障害があってもなくても関係ないです。守るべきものは命です。命に差はなく、どんな命も尊いのです。ひとりひとりが社会の大切な

一員です。支え合って生きていくのが人なのです。生きていくだけに役に立っている命です。いろいろな命なんてひとつもない。私はそう思いながら生きています。

## 名前も奪われた

障害当事者家族 増田弘子さん



障がい者福祉センターに毎日通所する、重度重複障害の息子と暮らししています。今回の事件に関して、心はひっかかっているのは、事件の被害者の名前は出されず、性別や年齢だけが報道されていることです。また、マスコミなどへの対応も考慮されているので

しょうが、障がい者施設に子どもを預けていることを知られると迷惑がかかる」と考えている人もあるといった報道もされています。しかし、私も感じていたのは、入所施設に入って暮らしている人は、存在しないことになっていったのか」ということです。

でも名前も二重に奪われていることに衝撃を受けました。このような存在を作り出すのは何なのでしょうか。事件を忘れないで、黙っていないで、考えていくことが大事なのではないかと思っています。

## 不公平感が背景

精神障害当事者 徳山 環さん



今回の事件は「障害者が社会にとって不必要なものとして抹殺されてかまわない」という発想のもと遂行されたものです。そういう

意味では、知的障害だけではなく精神障害や身体障害を抱える人に対して向けられる可能性のあるものでした。容疑者は、障害者はいないほうがよいといった信念のもとに犯行に及びました。これに対して、それは優生思想ではないかと不快感を示す人が多く、一方で、容疑者の主張に理解を示す反応がネット上で

## 報道が一人歩き

片山 和枝さん  
福祉学生 福祉大学 社会学

今では誰かが生きづらい社会になっています。多くの人たちが苦しんでいる中で、相対的に国家によって保護されていると思われている障害者に対する不公平感が、本来人が障害を抱えることが望ましいことではないという素朴な観念と結びつき、あの容疑者のような発想をつくりあげたのではないのでしょうか。容疑者が優生思想の持ち主というだけで片付けてしまっただけでなく、思いが広がったような気がしま

今だけの人々にあふれる事件の記憶が残っているのでしょうか。私はこの事件を一生忘れてはいけないと思っています。容疑者が措置入院をさせた後に事件を起こしたこともあり、措置入院の見直しや問題点が取り上げられました。過激な報道の影響もあり、措置入院患者は精神障害者であり、犯罪を起こす可能性があるというイメージが社会の中に広がったような気がしま



殺傷事件が起きた「津久井やまゆり園」と集まる報道陣

## 「働き方」見直しから

弁護士 大江 智子さん



この事件を考える際、「優生思想や障害者を生かしてはいけない」という容疑者の考えや、インターネットなどの中で後押しした声がたくさんあるということに目を向けてはなりません。容疑者だけに何らかの形で刑事責任を取らせたくても、そうした考えがなくならないうちに、第二の犯罪、第三の犯罪が起きるのではないかと懸念しています。なぜ障害者を殺傷すたのかその背景には、若者の雇用状況や福祉施設の働く人たちの労働環境の厳しさなどがあると思います。正社員としての働き口がなかったから福祉の現場で働く、という人は多いですが、そんな人たちが十分な賃金や休みを与えられず生活に苦しんでいるのに、障害者

## 問題矮小化を危惧

精神科ソーシャルワーカー 西村 睦美さん



この事件で一番気になるのは、国の対応です。障害者は生きる価値がない、国に代わって社会のために実行した」という容疑者の考えを、国として正面から否定し、あらゆる人がすべて大切であるというメッセージを発信してほしいと思っています。精神科医療の問題に矮小化されていると思うと同時に、措置入院から退院された方々への見守りや支援という名の管理や監視が押し進められているのではないかと強い不安を感じています。精神疾患はがんなど5大疾患の一つです。疾患教育や遅れている治療環境の整備にも力を入れていかなければならないということを訴えていきたいと思っています。

人との違いについて考えますが、答えが異なります。また、身近な人たちが障害者について話す機会を積極的に持つことが、その過程の中で社会が変わっていくことを信じています。